

僕とチョコの召喚獣

ヴァスパミナーニエ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バレンタインデーでのお話です

僕とチヨコの召喚獣

目

次

僕とチヨコの召喚獣

2月13日 22時頃

とある家

キツチンから声が聞こえてくる

「フフフ、とうとう完成しました。これであの

振り向いてくれます。」

謎の人気が持つ美しく包まれた紙袋からは何か不気味なオーラが出ている

「明日が楽しみ。でもまだどうやつて渡せば。そこまで考えていなかつた。」

ナレーター「作つてから渡すことに気づいた、ありがちな展開に」

人も

2月14日 8時 Fクラス

吉井 「ふあー、さすがに朝はきついなー」座つて大あくびをし、背伸びをしている

坂本 「どうした、明久 やけに眠そうだな」横から声をかける

吉井 「イヤー、昨日ちょっと遅くまで起きていたから、ちょっと眠くてね。」

坂本 「また、ゲームかよ、だからお前はバカなんだよ！」

吉井 「・・・まあそんなとこかな」

坂本 「あんまりゲームばかりすんなよ、たまには勉強しろよ」

「おはようございます」

島田 「おはよう」

吉井 「あつ姫路さん、美波おはよう」

坂本 「おはようさん、今日はやけに遅いな、いつもは明久より早いのに」

姫路 「ええー昨日ちょっと遅くまで起きています。」

島田 「ウチもー、おかげで眠くて眠くて」

坂本 「おいおいお前らもかよ。一体何が・」「あつ、今日は」「バレンタインデーだ

ナレーター 「さすが元神童と言われただけある。」

坂本 「となるとここにいてはまずい、島田はともかく姫路のチョコを食べたら」「走

馬灯」

吉井 「どうしたの？ 雄二？」急に黙つて

坂本 「まだ、明久は気づいてない、どうする】

「いや一体何で、遅くまで起きてたのかと思つて」

吉井 「雄二何か凄い汗だよ」

姫路 「私は、ちょっと料理をしてまして」

坂本 「しまつた。墓穴を掘つてしまつた。】

姫路 「そうそう、今日は・・・」

チヤイム キーコーカーコーン

坂本 「お、授業始まるぞ」【助かつた、だがどう逃げるか】

授業中

ケータイ画面

雄二 > 明久

明久、今日がいつかわかるか？

明久 > 雄二

何を言つているんだよ雄二 2月14日だよ。

バレンタインデーでしょ フツ

雄二 > 明久

何だ知っていたのか。後はどうするかだな

明久、雄二 「どうやってチョコから逃げれるか】

ナレーター 「バレンタインデーにチョコから逃げる。男 二人である」「時は流れ、

放課後」

坂本 「何とかここまでこれた」

明久 「そうだね。雄二」

雄二 ケータイ

翔子 > 雄二

今どこ。会いたい

雄二 「ヤバイ、ここで本当の場所言つたら姫路らにもばれる、それに】

雄二（明久）> 翔子

おお、翔子、俺も会いたかったぞ。今は屋上にいるぞ。早く会いたい

坂本 「明久ー、何かつてに送つてるだ、」

明久 「雄二、男には逃げてはいけないチョコがある」

坂本 「明久、てめえ、自分の立場を見てから言え」

翔子 「雄二」

坂本 「うわ翔子いきなり後ろなら声かけるな」

翔子 「ごめん、それよりこれ」

ハート型の箱を手渡す

坂本 「おうありがとうな、そつか今日、バレンタインデーだつたな チヨコか?」

翔子 「うん、あつその前にここに押印して ちゃん渡せたか証拠になるから」

紙を出す

坂本 「おう、いいぞ、おいそれ婚姻届」

坂本 「絶対押さねーからな」(明久が、無理矢理押そうとしてる)

坂本 「明久ー、危ないことするな、俺を破産させるきか」

明久 「いいじやん結婚しちゃいなよ」

翔子 「もういい。吉井ありがとう。」

「雄二、これ」

坂本 「おう」

翔子 「あつそれから、吉井にお客さん」

「そこの2人出てきたら」

吉井 「誰だろ」

坂本 「嫌な予感しか、しないけど」

扉の影から 姫路、島田 が出てくる

姫路 「吉井君こんな所いた。」

「アキ こんな所で何してたの?」

吉井 「2人から逃げていたなんて言えない」

「ちよつと、雄二と2人で話していくね」

「そうなんですね。それより今日はバレンタインデーなのでチョコをどうぞ。」

姫路 「ありがとう。」

島田 吉井 「あつ姫路するい、自分ばかり、アキ

ウチのも受け取りなさいよ」

吉井 「えつ美波も」

島田 吉井 「私がウチが渡しちゃいけないわけ?」

「いえいえ、嬉しいです。ありがとう」

「はなから、そんな風に喜べばいいの」

「うん、ありがとう」

吉井 「今、食べてみてもらえませんか?」

吉井 「いやちよつと今は」

坂本 「食べるよな、明久」

吉井 「雄二なんてことを、僕を殺すきか」

坂本 「さつきのお礼だ」

姫路 「もしよければ、坂本君もいいですよ。」

翔子 「ピック

翔子 「雄二は食べちゃダメ。私だけのしか」

坂本 「翔子、まだいたのか」

姫路 「すまんな、姫路」

吉井 「明久ちゃん食べなきやな」

吉井 「うん、じゃ1つ」

姫路 「あれ普通のチヨコの味だ】

吉井 「どうですか?」

吉井 「うん、美味しいよ」

姫路 「良かつた、昨日ちょっと風邪気味で味がわからなくて、おいしくできてて良

かつたです」

坂本 「何、俺も食べてみていいか?」

翔子 「雄二はダメ」 綱で縛る

島田 「さつきから瑞希ばかりずるい。私も食べてみて」

吉井 「うん、美波美味しいよ」

島田 「どっちが美味しい?」

吉井 【ここは、どちらを選んでも地獄だ。】

「2人ともおいしくて順位なんてつけれないよ」

ナレーター 「吉井君にしてはベストアンサーである」

島田 「そうよね」

吉井 「うん」

坂本 「そろそろ帰るか」

一同 「それじゃさようなら?」

吉井 「雄二何か目眩が」

坂本 「どうした。明久 まさか、時間差で毒がチョコの狂気が来たのか。」

吉井 「あつおばあちゃんが読んでる?」

坂本 「いくな、それは地獄の入り口だ? 明久!」

ナレーター 「やはりこうなるのであつた。」

場面が代わり

下駄箱

久保 「吉井君の靴箱はここか」

【昨日、作ったこの惚れ薬入りのチヨコを吉井君に食べてもらえばウフフフ

フ

ナレーター 「昨夜の???は久保君であつた」

吉井 「はあー何とか蘇生できた。雄二ありがとうございます」

坂本 「何とか間に合つて良かつたよ」

靴箱をあける

吉井 「あつまたチヨコが、一体誰が?」

坂本 「名前書いてないのか?」

吉井 「久保君つて書いてある」

坂本 「ちゃんと食べてお礼言うんだぞ」

吉井 「もう一チヨコはこりごりだー」

ナレーター 「モテる男の悩みは羨ましい、その言葉であるもの達が動き始めた」

F F F 「吉井 坂本 お前ら女子からチヨコもらつたんだなー」

吉井 坂本 「來たー」

ナレーター 「あーあ、捕まつた。」

「さあ私も帰りましょうか」

最後まで読んでくださいありがとうございました。